

探訪記

畑野浦を歩いて

高木 嘉吉

佐伯史談会、去る一月二十七日の日曜、畑野浦の探訪を行つた。会として、これまですでに二回畑野浦を訪れているが、私は二回とも妻を伴つて行けなかつたので、富沢会長(畑野浦史談会)に依頼して、一人でも行つて見たいと思つていたのであるが、羽塚・清田・市野瀬・藤間口の五會員も行を共にすることになつて、賑やかな一行になつた。

午前八時半に駅前を出る定期バスを私どもは利用したが、幸い快晴無風のよい天気であつた。久しぶりに越す峠道は、ヤチが長かつたが、車窓の右にあるいは左に展開する風景は、時の移るのを忘れさせた。明石秋堂の

入津に下らんと欲して 雲坂長し

微かに 鶯く 氣候 涼涼と愛するに

空は横たう一横 南北と界し

北は妻背々として 南は妻背なり

の詩を口ずさんでいる中、バスは畑野浦の入口福網代の停車場に止つた。富沢会長はじめ田中光・富高唯一・門田生太・山下俊明・堀月健五郎・観谷文雄・富高屋平治の皆さんが出迎えて下さつた。

まづ改築が進められている清水庵の作業場に案内される。山のような木立、材料の向う小屋の中には切組まれた柱が積み重ね、彫物が入念にすまわられている。

それから福網代の清水庵にまわる。立派な庵であ

るが、これは老朽している。その序堂近く、中空から高い滝がかけり、滝つ尻付近がそのまゝ境内の一部になつており、きわめて幽すいである。復興建築の完成が待たれるわけである。

境内の墓地には、二十ばかりの五輪塔と、十ばかりの板碑がならんでいる。五輪塔は倒伏散乱しているのを、畑野浦の史談会員が発掘整理したものである。墓地の由来、たれを祀つたのかなど明らかでないが、その解明は畑野浦史談会の今後の課題である。

なお境内、崖近くにある二米ばかりの四角柱の供養塔、「入津畑之浦 願主孤舟」と刻まれているが、見事なものである。

清水庵を後にして、部落の中央に入ると、具道にそつて軍人墓地がある。明治以後の、幾多の戦後に殉じた人々と祀つたものである。豪壮な墓石の下に、護国の英霊が静かに眠っている。必がづく私達の頭の中を、明治百年の歴史が、走馬燈のように通り過ぎてゆく。

つづいて、部落の中央にある唐甲塔に案内された。唐中塔は昔の道の傍によく見かけるが、大体高さ一米以下で、あまり大きなものはない様である。ところが畑野浦のは、昔の道にそつて五基あるが、いずれも大きく、堂々たるものである。

中女のもつとも大きいものは高さ二米二の、キ、然と天空にそびえている。その隣りののは元禄四年(一六九一年)の在銘、これこそ二米を越す堂々たるもの、いずれも我は校勘者であるから、中国地方から船で運んだものである。元禄・宝永等の年号があり、当時の人々の唐甲信仰の深さがしのばれる。

次に福泉寺の下の墓地を見学する。ここは広くはないが、畑野浦の歴史を築いた人々の墓石が、たくさん並んでいるが、その中で石祠の形をとつた(中の正面に五輪塔の刻出しあり)のものが、観る人々の眼をひいた。無灰岩を一念に細工した大きな石のほころいで、墓石としてはあまり見かけないものである。

それから、一回そつて福泉寺は詣でて、龍淵恭道師から、寺の歴史や部落の行事などを承る。

寺は妙心寺派の禪寺、慶長系代に創立され、はじめ西河内部落に考つたが、元禄系代に現地に移転して、今日に至つていふところ。恭道師は且以前から面識をいたたいており、檀信徒の教化にどうか、花園会の弘布のためには日夜勤まられていることは承知していたが、更に陶芸に興味を持ち、豪度に驚き慕いて、自分の作つた器で茶を煮ていると承つて、心温まるものがあった。

福泉寺の右手の墓地には貝塚の露出が見え、沃山に五輪塔がある。これらは後から述べるように、畑野浦の歴史を語るものである。

福泉寺を辞して、伊勢本神社に詣でる。参拝を終つて前記畑野浦史談会の人々と、神官 松本藤作氏と交えて座談会を持つた。

先づ富沢氏が、畑野浦文化戦年表の説明があり、誌目次々と発展して、有意義な一ときを持つことか出来た。

伊勢本神社は、応安元年(一三六八)の創建で、神武天皇を祀り、御神体は神武天皇が御東征の途次、畑野浦に立寄り、休養された際残された水

流であるといふことが、今日の史証の女史学の立場からは、神武天皇はその実在性を疑問視されているが、それ以外として、伊勢本神社は創立以来六百余年、畑野浦の氏神として人々に崇敬されているわけである。

富沢氏の説明によると、南北朝の時代は、菊池氏の一族が畑野浦に定住して、当地の開拓の業を担ったという。更に時代が下って湖ヶ原の復讐、西軍に属して滅亡した四國の長官我部の一族戸高氏が、畑野浦に上陸して定着した。戸高氏のこととは時代も新しく、戸高氏の家が深山あり、その宗家とされる家もあることから事実である。

菊池氏のことは立証出来ないが、伊勢本神社の創立された応安元年（北朝の年号）は、南北朝時代長慶天皇の第一年であつて、菊池武光が活動した時代である。応安元年から五年前の貞治二年（北朝）には菊池武光は、大友氏第八代氏時と馬屋敷に敗つて之を断つてゐる。はつきりとしたことは分らないが、菊池軍が豊後各地に動いたことは、十分に考えられることであつて、その一族が畑野浦に定住したことは、あり得ることである。

畑野浦の至る所に散在する五輪塔は、こうした歴史を背景とするものであつて、数百年前湖下活動した代表的人物の墳墓である。塩月五郎氏所持の石斧や、富高辰平治氏所蔵の「秋葉山木権現」のたての図りなどを見せたいのだが、これも今日の大きき収獲であつた。

かくて予定の見学を終え、三時半のバスで帰途にいた。終日好天に恵まれたが、畑野浦の海は夕陽ばかりかたいて、のたりのたりの波うつていた。

今この稿を終るに當つて、参加會員と共に、終日御案内下さつた富沢氏をはじめ、畑野浦史談会員の

方々、ならびに親切な御接待にあつた龍淵派道師、松木藤作神官に、深甚な謝意を表する次第である。  
(おわり)

レポート

源六原に土器を拾つ

建国記念の日、直川史談会と合同で

(羽柴 弘記)

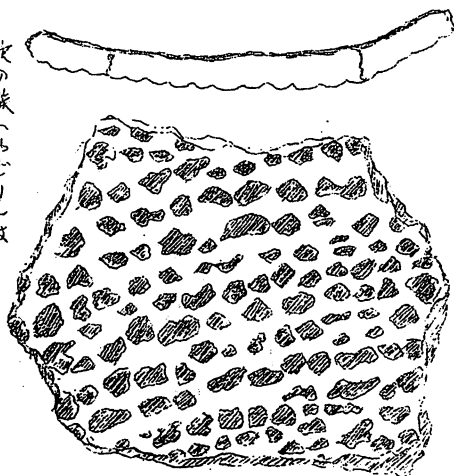
二月十一日 月曜 昔は武元節と称して、小學校では、実にそびゆる高き徳力——と歌つて、神武天皇の創業を偲んだものであるが、今日がう。建国記念日として官庁や学校は休み、家には申わけのように閑散と出しているが、しかしそれとチラホラである。

私も直川史談会と一しよになり、実住の人々の生活遺跡やさぐらうとうとうとになり、直川村上直見、久道徳川の七岸台地、源六原に出かけた。朝のうすし白い霧がちらついていたが、まもなく天気は折合つて、明るく日ざしとなり、目とんと寒さを演ぜない。

午前九時半、直川の史談会六名、佐伯から七名、出会うて見るといふ人数となり、和気あいあい、教習歩みあるうらなひ源六原の台地と思ひ思ひの土器拾ひである。幸い一番よく出るといふ中央部が栗林は、鍬を入れて深々と耕してある。手に手にスコップも豆鍬を手にして、シヤチ鉈やがらでんぐで掘り出しては、土器や石器の破片をブラ下ぐたビニールの袋におさめる。

この栗林は栗樹園として造成、よく耕してあるので、今忽ちこの表土に土器を求めても、見つからないのが当たり前、それにまかからずみんなが

土器や石器の破片と数個づつ拾ひ上げた。私は十次のような土器の破片を拾つた。



次の鍬（右側）は



新井雅雄氏の拾つたもの、右下の部分を欠いてしまつたので、捨てたものであろうか。この外頭から栗林七かと思われる破片や、經文式や弥生式土器かと考えられる土器片も数枚、それそれ多数採集された。

古代もかなりヤカかのぼつた時代、まだ農耕文化の発達しなかつた頃、この台地に何人かの人々が住んでいてたことか考へる。当時日本は耕すことを専らとせず、毎日谷とわたり、丘を越えて終日鳥や獣を追つて歩き、日暮ればは獲物を肩にしては家族に曳えられていた。女子供も走んでいなかつた。木の葉を拾ひ、草の実を煮め、おにぎりや餅を作つたりして貯え、こもしては、即ち強宍住居の生活、それが極めて素朴なものであつたにちがいない。この源六原は、その住居跡で